勤労奉仕の思い出

小林　正親

私が美唄工業学校に入学した当時は大東亜戦争が勃発した昭和 16 年の 4 月で、学校生活も軍事教練*1 と勤労奉仕に明け暮れた苛酷な日々であった。

特に勤労奉仕は、食糧増産報国隊の名のもとに我々も市内の各農家に春から秋にわたり年間 30 日に及ぶ出動が命ぜられた。

あれから 50 数年も過ぎ、薄れた記憶を辿り思い出して見ると、年 4 回の出動のうち 1 回の日数は 7 日間くらいで長い時は 11 日間に及ぶこともあった。

出動命令が学校に伝わると同時に援農先も決定し、生徒達は期間中の生活に必要な衣類、日用品、学習用具等を詰めた「リュックサック」を作業服の上に背負い、足には地下足袋に巻脚絆を巻き、各科毎に担任の先生に引率されて砂利道を 6 キロも 7 キロも徒歩で援農先に行った。部落の人々の出迎えを受けて対面式を行い、そこで受入れ先の農家の希望により、一戸当たり 2 名から 4 名の班が編成されて、各農家で作業を行うことになる。

作業の内容は、朝 8 時から夕方 5 時までは標準稼働時間で、春は、素足のまま冷たい水田の中に入り臑に蛭が付くのを気にしながら水苗抜きと、腰痛を堪えての田植え。夏は、稲と稗の区別も曖昧なままでの田の草取りに、体力が必要とされる除草機押しで、暑さと腰痛と疲労と汗だくの上に、虻との戦い。秋は冷雨で手がかじかむ中を鎌による怪我を気にしながらの稲刈りと、稲架がけから取入れまでの作業が主で、ほかには炎天下での燕麦刈りで大いに汗を流した。

宿泊は、初回と 2 回目の出動までは援農先の小学校の屋内運動場に古畳を敷き、臨時灯の裸電球を灯した応急避難所生活のような所で、夕食後は 1、2 時間の学習が行われたが、我々は、ちょっとした修学旅行の宿泊気分を味わったようだ。

3 回目以降は、受入れ先の各家庭に分宿し、家族の一員となり生活を共にすることになった。

食事はすべて各家庭で受けたが、当時の農家経済は非常に逼迫し、その上、物資不足の中で今日のような美食は考えられず、一汁一菜に漬物とプラスαが標準的なもので、そのαが問題であった。その代表的なものは卵焼き、鰊や鰈の干物に塩鱒などで、特に卵焼きは滅多に無いご馳走で、受入れ先に着いた時、学生達はその家に鶏が飼育されているか否かを先ずチェックし、鶏を発見すると大喜びをしたくらいであった。

食欲旺盛な若い学生達にとって、日常満足に口にすることの出来ない白米を無制限で食することができたことは、辛い農作業に耐え、苛酷な時代を乗り越えるための最大の糧になり、活力の原動力になったと思う。

（こばやし　まさちか　昭和 5 年生まれ）

*1　**軍事教練**　学校で現役将校を配属して学生や生徒を対象に行われた軍事の教育のこと。大正 14 年から昭和 20 年まで行われた。